文 化 財 学 習 会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　香西氏の史跡を訪ねる
講　師　立山　信浩（『笠居郷探訪』著者）
日　時　平成３１年１月２０日（日）

共　催
高松市歴史民俗協会
高松市文化財保護協会
高松市教育委員会

目　次

（本日のコースは通し番号1～27の順に進みます）

Ⅰ・はじめに

1　香西町　・・・1

2　磯崎山　・・・1

Ⅱ・宇佐八幡宮と藤尾城

3　宇佐八幡宮　・・・2

4　藤尾城　・・・4

Ⅲ・宇佐八幡宮の石碑・記念碑

5　日露戦役従軍記念碑　・・・7

6　「大正三年乃至九年従軍者」石板　・・・8

7　満州上海事変凱旋記念碑　・・・8

8　郷社宇佐神社碑　……9
9　久保利作翁銅像碑　……10
10　香西神社　……11
11　松尾社と香西社寺　……14
Ⅳ・芝山への道筋
12　元治二年の石標　……15
13　エビス　……15
14　むきむき　……16
15　ハマスジ　……16
16　水軍屋敷とお水夫長屋　……17
17　長安寺　……18

18 つきあたりの地蔵 ・・・18

Ⅴ・芝山

19 芝山 ・・・19
20 芝山神社と天狗岩 ・・・20
21 芝山城 ・・・21

Ⅵ・萬徳寺

22 萬徳寺 ・・・21
23 萬徳寺の毘沙門天 ・・・22
24 学童疎開の寺 ・・・23
25 萬徳寺の石仁王 ・・・24
26 香西町軍人墓地 ・・・25
27 護国精霊之墓 ・・・26

Ⅰ・はじめに

1　香西町

もと中笠居村を経て、大正四年（一九一五）二月十一日より香川郡香西町。昭和三十一年（一九五六）九月三十日、高松市の合併により香西五町（香西本町・香西東町・香西西町・香西南町・香西北町）となり現在に至る。

2　磯崎山

香西本町・宇佐八幡宮のある小山（標高二十メートル）の古名。現在は、藤尾山、御山（みやま）などと呼ばれる。

香西資村（すけむら）のとき宇佐八幡宮（通称藤尾神社）を遷座。藤尾神社が遷座されたことにより、磯崎山の呼称も藤尾山、御山と変化した。

天正三年（一五七五）香西佳清（よしきよ）のときに磯崎山に藤尾城が築城され、宇佐

八幡宮は山の上に移されたが、藤尾城廃城後、再び宇佐八幡宮が建てられて現在に至っている。

★磯崎山から南に伸びる参道は旧御厩道。かつて、御厩で焼かれた陶器が牛車・馬車に満載されてこの道を通り、香西港の機帆船に積み込まれた。途中鬼無駅を通る。

★宇佐八幡宮正面の参道脇には、御手洗池（みたらいいけ）とよばれる池があった。もとは、八幡宮への参拝者が手や口を洗い清める湧水を貯めた小さな池であったようだが、明治十六年（一八八三）に宇佐八幡宮が失火全焼した後、防火用水として大規模な池に造り直された。現在は埋め立てられ、駐車場になっている。

Ⅱ・宇佐八幡宮と藤尾城

3　宇佐八幡宮

縁起によれば、承久の乱の功績で幕府御家人となった香西氏初代の資村（すけむら）が、嘉禄～安貞年間（一二二五～二九）に豊前国宇佐八幡を勧請して創建したという。祭神は八幡三神（応神天皇、神功皇后、仲哀天皇）。もと笠居郷三村の郷社。

この八幡三神は外的防護の武神であり、源氏の氏神・守り神であったことから、源氏が鎌倉幕府を開くと、源氏に従った全国各地の御家人たちは主家の源氏にならって、自分の領地に八幡神社を建てた。

幕府御家人となった香西氏初代資村もまた、総本社である豊前（大分）宇佐神社から分霊を受け、香西の磯崎山（藤尾山）に宇佐神社を建てた。

後に、農耕の神としての性格を合わせ持ったことから信仰は庶民へも広がり、全国の八幡系の神社は三～四万。分祀の多さでは稲荷神社に次いで第二位。

香西には宇佐八幡宮と平賀八幡宮の二社がある。

★明治六年（一八七三）郷社に格付けされ社名を宇佐神社とした。現在も香西、鬼無、下笠居三地区の氏神。境内にある多くの石像物には、香西、上笠居（鬼無）、下笠居の氏子名が併記されている。

★平成十六年の春祭りから、モモテユミ神事が復活している。
★平成十七年一月に生田塩田の塩釜神社が遷座された。
★平成十九年三月から本殿拝殿の全面改築が行われ、平成二十一年五月竣工。
★主な祭礼…どんと焼き（一月十五日）、節分祭（二月三日）、社日祭（三月と九月の下旬）、春市（四月第四土曜日）、秋祭り（十月第一土・日曜日）、みかん焼き（十二月第二土曜日）、杜氏祭（十二月二十二日）

4　藤尾城

佐料（さりょう）城に代わる香西氏最後の居城。

宇佐八幡宮建立の三五〇年後、天正三年（一五七五）香西佳清が、長宗我部元親の讃岐侵攻に備えて、磯崎山に築城した城。天守部分の標高二十メートル。このとき宇佐八幡宮は上の山に移された。

築城開始七年後の天正十年（一五八二）七月末～八月六日、長宗我部軍の藤尾城侵攻が始まり、一体は壮絶な「藤尾合戦」の舞台となったが、佳清が長宗我部元親に下って戦いは終了。その後、藤尾城は、天正十三年（一五八五）、秀吉の四国征伐により廃城。

築城から廃城までわずか十年間の城であった。

藤尾城跡（現在は宇佐八幡宮）は、昭和五十一年（一九七六）七月、高松市史跡に指定されている。

ただし、平成五～十九年にかけて高松市教育委員会により四次にわたって行われた藤尾城跡発掘調査では、藤尾城に直接関係する遺構は確認されなかった。

★おそらく、藤尾城築城に強い批判と抵抗感を抱いていた村民・町民が、宇佐八幡宮再建に際して藤尾城の遺構を徹底的に排除・撤去したのではなかろうか？

★藤尾城の遺構の排除・撤去が行われたのは、次の期間であったと思われる。

①廃城から宇佐八幡宮が藤尾山に戻されるまでの約二十年間（一五八五～一六〇二？）

②宇佐八幡宮の失火焼失から社殿再建までの十六年間（一八八三～一八九九）

③宇佐八幡宮の社殿が大規模改修された二年間（一九二七～一九二八）

Ⅲ・宇佐八幡宮の石碑・記念碑

藤尾城廃城から約二十年後の慶長年間（一六〇二年頃というが不明）、上の山に移されていた宇佐八幡宮が再び藤尾山にもどされた。

八幡宮の祭神（八幡三神）は古来から弓矢・武道の神として信仰され、軍神・武神としての性格を強く持っていた。そのことから、各地の八幡宮は、明治以降の軍国主義体制下で出兵兵士の武運長久を祈願する国民精神動員の役割を果たす舞台ともなり、戦勝祈願の式典の場、村民の入営、入隊、出兵の式典の場となった。

★全国各地の八幡宮には、明治～昭和期に行った対外戦争に関する石造物（記念碑・石碑・鳥居・しめ柱・玉垣など）が多数残されている。

★鬼無・香西・下笠居三地区からの出兵兵士は、宇佐八幡宮で出征式典に臨み、そこから鬼無駅へ向かった。

★香西宇佐八幡宮には、「日露戦役従軍記念碑」、「大正三年乃至（ないし）九年従軍者」の石板、「満州上海事変凱旋記念」注連（しめ）柱、「香西神社（旧忠魂社）」などがあり、いずれも貴重な歴史資料となっている。

★全国に三万～四万の八幡系神社があるといわれる。

戦後の八幡神は憲法原則（平和主義・政教分離など）の下で諸願成就の神となり、八幡宮は庶民的な神社となった。

5　日露戦役従軍記念碑

正面石段の西脇にある香西町最大の記念碑。日露戦争終戦の翌年に当たる明治三十九年（一九〇六）三月三十日建立。表面の碑文には笠居三村からの従軍者は三百三十五名、そのうち戦病死者二十六名、負傷者四十四名とある。

裏面に三村従軍者全員の氏名と官等級を戦死者（二十一名）、病死者（六名）、帰還者の順に刻している。

★日露戦争の戦没者は全国で八万八千余名。日清戦争の戦没者一万四千余名と合わせて、十年間に全国に約十万世帯の遺族が生まれた。

★ポーツマス条約によって、日本は大陸における諸権益を得たものの、賠償金は得られず、戦争による多大な犠牲を払った国民の期待を裏切った。政府への不満は、日比谷焼打ち事件（条約締結日の一九〇五年九月五日に発生）を契機に地方へも波及し、それを抑えるために日露戦争の出兵兵士や遺族を顕彰する行事や記念碑建立は全国各地で特に入念に行われた。関連する記念碑は大型のものとなった。

★市の法泉寺大釈迦像は、県内の日清・日露戦争戦没者の慰霊塔（忠魂碑）として、日露

戦争終戦二年後の明治四十年（一九〇七）十二月に建立。

6　「大正三年乃至（ないし）九年従軍者」石板

香西宇佐八幡宮の正面石段下にある四枚の石板の裏面は、表題に「大正三年乃至（ないし）九年従軍者」とあり、百十二名の従軍者名（下笠居村三十名、上笠居村三十二名、香西町五十名）と十八人の発起人名が刻んである。

★大正三年（一九一四）は第一次世界大戦勃発の年。日本は八月二十三日、ドイツに宣戦布告し、青島（チンタオ）などへ出兵した。

★大正九年（一九二〇）九月、善通寺の第十一師団がシベリア出兵のためにウラジオストクに派遣された。

7　満州上海事変凱旋記念碑

参道に建つ大きな注連柱（しめばしら）は、昭和十一年（一九三六）建立の「満州上海事変凱旋記念碑」であり、笠居三地区別に出征者名が彫られている。

8　郷社宇佐神社碑

大正三年（一九一四）、神辺晟太・多満夫妻が建立した「郷社宇佐神社」の石柱には、その側面に「郷社宇佐神社記略」と題する長文が刻まれており、宇佐神社創建の経緯とその後の歴史が詳しく述べられて貴重な資料となっている。

★「郷社宇佐神社記略」の文中には、宇佐神社城郭（藤尾城）を建設したことに対する氏子（村民）の率直な気持ちが刻まれている（傍線部分）

「郷社宇佐神社記略」

…伊賀守香西佳清は社殿を是竹山（上の山）に移し、藤尾山には佐料城を移して居（住まい）とした。神罰を恐れながら造った塁（とりで）は未完のまま、防ぎ戦うに利なく、やむなく元親とは講和したが、豊臣秀吉の四国平定で佳清は君臣離散、城は遂に滅んだ。思うにこれは、八幡神への不敬の報いであった。…

9　久保利作翁銅像碑

久保利作氏は香西の漁業、教育、産業の発展に貢献した幕末～明治（一八四一～一九〇六）の人。中笠居村村長。

香西を代表する網元として、香西鯛網漁の復興・隆盛に尽力。明治十六年（一八八三）の失火により焼失した宇佐八幡宮の再建、三和神社における魚の法会実施、香西財産区への山林寄贈などを行った。

香西宇佐八幡の久保利作氏銅像（大正十〇年・一九二一建立）は戦時中の金属回収で供出され、今は台座だけが残っている。台座には、久保利作氏を顕彰した碑文が残されている。

〈碑文〉

「翁の姓は久保、通称は利作。風貌人格とも抜きんでており、公益を為すことを楽しみとした。漁を行えば潮が雨のごとく降り、大ハマグリは霞のごとく気を吐いた（大漁であった。）そのため家も人も自給し自足した。香西はそのような重要な港で、町はにぎわい繁盛した。翁が漁業に、教育に遺した功績はかつてないものがあった。令息もその跡を継ぎ、

世に益を民に利を与えている。郷土の誰もが翁の風格を仰ぎ、銅像を建てて姿を残そうとした。これは、積善の余慶であり、後世の人に模範を残すのである。それにしても田雑氏は大したものだ。その妙技は神業の域に入り、像の眉目は生きて動いている。これで翁の功績は千年も伝えられるであろう」　（久保利作翁銅像台座の碑　おおよその意味）

※積善の余慶＝慣用句「善行を重ねた家には子孫まで及ぶ幸福がやってくるのだ」

※田雑氏は像を鋳造した香川県立工芸学校校長

10　香西神社

昭和十年（一九三五）に香西尋常小学校に建立された忠魂社を、昭和二十年（一九四五）十月、香西神社と名前を変えて宇佐八幡宮の宇佐会館前広場に移したもの。

終戦直後のこの時期は全国でＧＨＱ軍政部の学校視察があり、そこに向けて全国各市町村で忠魂社の移転あるいは撤去が行われた。

※忠魂社…天皇と天皇制国家に忠義を尽くして死んだ者の霊（英霊）を祀るための地方の社（やしろ）または碑。忠魂碑。忠魂塔。もとは幕末の戊辰戦争（一八六八～一八六九）における官軍（新政府軍）の戦死者の霊を祀った各藩の招魂社がはじまり。

明治政府は市町村単位に忠魂社を、各県単位に護国神社を、それらをまとめた全国単位の靖国神社を建てて国家（天皇）に忠義を尽くして戦死した者の霊（英霊）を合祀することを決定した。靖国神社は陸海軍省の所管とした。

★香西忠魂社は昭和十年（一九三五）十月、香西尋常小学校の校庭に建立。

★太平洋戦争終結後、占領政策による忠魂社（忠霊塔）の破棄通告があり全国的に忠魂社の撤去（または移転）が進んだ。香西の忠魂社は香西小学校から宇佐八幡宮に移された。

昭和五十五年（一九八〇）九月に香西地区連合自治会が社殿の大改修を行ったとき、香西神社の祭神を、西南戦争以後第二次大戦までの戦死者二百三十二柱の他に、香西資村ら先賢十四柱を加えた。

このとき新たに祭神とした先賢十四柱とは香西資村、香西佳清、瀬戸屋善兵衛、植松彦太夫のほか明治～昭和期の香西の村政・町政にかかわった村長・町長・議員ら十名である。

［**香西神社について**　このお社は、昭和十年秋　現在の香西小学校校庭の一隅に、忠魂社として建立されましたが、昭和二十年社名を香西神社と改め、この地に移転修築されたものであります。祭神は、郷土香西を今日の姿にまで発展させるに力を尽くされた香西左近将監資村公を始め、十余柱の先賢と、西南戦争から大東亜戦争に至る戦役で一身を祖国に捧げられた二百三十余柱の英霊が合祀されています。建立当時、神さびて荘厳であったお社も、風雪四十五年、その尊厳を維持することが難しいまでに老朽化しましたので、この度地区住民各位の誠心を結集して改築したものであります。ここに経緯を記して後世に伝え、多くの人々がお社の尊霊に対し、永く敬虔の誠を捧げられんことを願うものであります。昭和五十五年九月吉日　香西地区連合自治会］（香西神社現地に建つ説明板）

「**香西神社祭神尊名一覧**

○自治功労者（先賢）十四柱　香西左近将監資村　香西伊賀守柱清瀬戸屋善兵衛　植松彦太夫　久保利作　久保栄吉　神辺晟太　泉川晃義　泉川秀登　片岡亀吉　泉川亮平　久保徳次　愛染藤太　本田忠雄

○戦傷病死者二百三十二柱（略）」

（昭和五十五年十月、香西校区連合自治会が会員に配布した資料）

11　松尾社（まつのおしゃ）と香西杜氏（こうざいとうじ）

宇佐八幡宮の本殿裏にある松尾社の祭神は、酒の神、醸造の神であり、香西杜氏の信仰を集めた。松尾社の玉垣には、かつての香西杜氏の名前や蔵元名が彫られている。

杜氏は酒を醸造する作業の長であり、酒造りの指揮者。香西浦の里人は天正年間（一五七三～九二）頃から業務の余暇に酒造りをしていた。明治以降、香西杜氏の評価が高まり、香西を代表する出稼ぎ産業となった時期もあった。香西杜氏は酒造りに出かけるとき、帰ってきたときに必ず松尾社にお参りした。

香西杜氏の醸造になる銘酒として次の二十の銘柄が挙げられている。

国粋　宵月　宝美人　琴の露　綾菊　日出龍　玉浦　楽心　竹の友　月星　大吉　賀寿美　長寿楽　朝鷹　金龍　四方戒　歌菊　凱陣（以上香川県）勢玉（徳島県）　初勢（愛媛県）　「香北の観光と産業」（昭和二十九年・香西町観光協会刊）

松尾社の隣の塩釜神社は平成十七年（二〇〇五）に生島塩田から遷座されたもの。

Ⅳ．芝山への道筋

12　元治二年（一八六五）の石標

大石米屋の脇にある石標

南面　右高　松江（え）一里

西面　右　加王口（かわぐち）江（え）二丁　左　白三年（しろみね）え二里

北面　元治二年乙丑（きのとうし）正月吉日　催主義右衛門／和泉屋義兵衛／木曽根長兵衛／玉屋長兵衛／松本屋喜助／中磯屋太郎

13　エビス（えびす）

中塚加茂神社の通称

中塚賀茂神社のもとの名称は中須賀恵比寿神社。正式名称が中塚加茂神社と変わった今も、地元での通称はエビス。

香西三浜の恵比寿神社の一つであり、他の二社と同じく海辺に建つ神社であった。（かつ

てはこの神社の近くまで海がきていた）

14　むきむき（向き向き）

むきむきの家並が比較的残っているのは、中塚のエビス（中塚加茂神社）の西、ハマスジの南あたりの生活道であるが、今回は参加者百名規模の大移動となることから、この地域には入らない・・・。

15　ハマスジ（浜筋）

香西港から長安寺へ向かうストレートな道。

ハマスジは、入り組んだムキムキの集落の外側（北側）の浜辺に沿って造られたすっきりした直線的な道である。海側（北側）には水軍屋敷（船頭屋敷）が、南側にはやや入り組んだお水夫（かこ）長屋が建っていた。かつての中須賀軍港（香西軍港）の中心部が、ハマスジ沿いにあった。

16　水軍屋敷とお水夫（かこ）長屋

備讃瀬戸の海賊制圧のため鎌倉時代に造られた香西水軍は、江戸時代に入っても藩主の参勤・帰城の航海担当を命ぜられるなど、活躍した。香西港は香西水軍の根拠地として整備され、ハマスジに沿って広さが二畝（六十坪）の屋敷が十二軒並んでおり、香西水軍の船頭たちが居住していた。藩政時代には藩主の御座船の護衛にも従事した。近くのスソにはお水夫長屋が二十軒ほど残っていた。

★領主・藩主の命を受けて働く水夫を御用水夫（ごようかこ）という。藩の軍船や輸送船、自前の船などにのり、海上輸送などの御用（公務）に従事する。水主、水手、加子とも表記し、いずれも「かこ」と読む。

香西の漁民は、早くから香西氏の御用水夫として働いたが、生駒、松平の藩政時代のも中須賀のスソにお水夫長屋（船子長屋）を与えられ、御座船の操船など藩の御用水夫の主力として働いた。

17　長安寺（ちょうあんじ）

特留山長安寺。浄土真宗興正派。本尊阿弥陀如来立像。香西九か寺の一つ。明治元年（一八六八）、長安寺で「郷校（笠居三村教育所）」が開校。生徒約百名に、笠居郷初の本格的初等教育機関としての役割を果たした。

四年後の明治五年（一八七二）八月、学制発布を受けて香西小学校、中山小学校、亀水（たるみ）小学校、佐料（さりょう）小学校が開校し、長安寺の郷校は閉鎖・終了。

18　つきあたりの地蔵（マエカタの地蔵）

常善寺参道と西臨港線の交わるところにある地蔵。

【私らは突き当り地蔵と呼んでいた。中塚のハマスジから西へ歩いたら、ちょうど突き当りにあるから、突き当り地蔵。】

【昔、道路をつけ変えるか何かで都合がでけて、マエカタのお地蔵さんにちょっと動いてもらわないかんことになったんやと。それで、お地蔵さんにお許しをもらわないかんので、

お地蔵さんと話ができる人を呼んで来て事情を言うて頼んでもろたんやと。そしたらお地蔵さんは「動きとない。ここがええ」言うんやと。どしても動いてくれませんかと、もいっぺんお聞きしたら、「やっぱり動きとない。ハマスジがまっすぐ見えるココがええ」言うたんやと。それでマエカタのお地蔵さんに動いてもらうんはやめたんやと。】

V・芝山

19　芝山

柴山。香西北町の海に突き出た半島状の小山。標高四十四メートル。古くは小さな島（陸繋島）で、満潮時には橋で往来していたという。香西港にとって芝山は、北西の強い季節風を防ぐ地理的位置にあり、香西港が良港とて発展した根拠の一つになった山である。

後藤点の創始者、後藤芝山（しざん・一七二一～八二）の父友貞は、藩財政窮乏による人員整理にあい、芝山の麓で郷士（ごうし）として半農半漁の生活に入った。そのため後藤芝山は、香西で育ち、芝山から城下まで一里の道を通って学問に励んだという。

★山頂にある享保十一年（一七二六）十一月建立の大蔵経教塔は、建立主香西寺。塔が建立された享保年間は、ほぼ十年間を通して豪雨、洪水、落雷、干ばつ、地震、害虫被害、天然痘の大流行などの災害が相次ぎ、盗賊の出没もあった。

20　芝山神社（しばやまじんじゃ）と天狗岩（てんぐいわ）

芝山山頂にある神社。祭神は大歳神・御歳神・大国主神・事代主神・弁天神の五神。

★もとの神社参道は、登り口から拝殿まで、ほとんど一直線であった。昭和六十三年（一九八八）に「さぬき浜街道」（臨海産業道路）開通の際、参道登り口を切り取られたため、現在のような屈折した階段になった。一直線であった時の参道は、浜街道の芝山交差点の中央あたりから始まっていた。

伝承によれば、芝山は白峯と八栗を行き来する天狗の通り道に当たっているとされた。山上には見事な枝ぶりの天狗松がそびえ

ていたが、今は枯れている。芝山神社の本殿前には天狗岩がある。

21　芝山城（しばやまじょう）

香西北町の芝山（標高四十四ｍ）山頂部にあった香西氏の出城。香西資村が佐料城と勝賀城の築城にかかったときから海上警備のための出城、狼煙場として守兵が置かれ、以後代々の城主により、居城、詰め城に次ぐ三番目の城として重視された。

香西佳清は、天正三年（一五七五）から始めた藤尾城築造に伴い芝山城を補強し城塞化した。香西氏家臣で円座城主の渡辺市之丞、三之丞が城代として守った。本丸四×六間、北の丸三×五間、南の丸四×七間。

Ⅵ・萬徳寺

22　萬徳寺（まんとくじ）

吉祥山多聞院萬徳寺。高野山真言宗。香西九か寺の一つ。

★本尊毘沙門天（多聞天）は聖徳太子作と伝わる秘仏で、三十三年に一度の御開帳。昨年、平成三十年（二〇一八）、ひさびさのご開帳があったばかり。次の御開帳は、二〇五一年。

★一月中旬（今年は一月十三日）に行う病魔除けの百万遍大数珠操りは、中興第二世住職道峯法師によって文化年間（一八〇四～一八一八）に始められたという

★境内には、昭和二十六年（一九五一）五月建立の護国聖霊之墓があり、その周辺は香西町軍人墓地となっている。

★昭和十九年（一九四四）九月には、大阪からの学童疎開を受け入れた香西町四か寺の本部となった。

23　萬徳寺の毘沙門天

萬徳寺の本尊仏で、三十三年に一度だけご開帳される秘仏。脇侍として右に吉祥天、左に善膩師（ぜんにし）童子を置いた三尊仏形式をとる。毘沙門天と吉祥天は夫婦であり善膩師は子供だとされる。毘沙門三尊が揃っている例は少なく、満徳寺の三尊は貴重な例で

ある。

24　学童疎開の寺

昭和十九年（一九四四）七月、サイパン島日本軍が玉砕し、七月以降は日本国土が米軍の爆撃空域に入ったために、本土空襲は避けられなくなった。こうした戦況の悪化の下で学童疎開が始まった。

昭和十九年（一九四四）九月、香西町では四か寺が大阪からの学童疎開を受け入れたが、萬徳寺は香西町四か寺の本部となった。＊香西町の疎開児童（計百五十五名）を受け入れたのは、萬徳寺（四十五名）、西光寺（四十五名）、常善寺（三十三名）、長安寺（三十二名）

【大阪から疎開児童を引率して来られた先生の中に、八木先生という音楽の先生がおられまして、香西出身の勝浦茂夫さんという若い海軍兵がフィリピン特攻隊攻撃で戦死したとき、勝浦茂夫さんを讃える歌の作曲をお願いしました。勝浦さんのお墓は、萬徳寺境内の軍人墓地にあります。】

「香西の西光寺へ集団疎開に行きました。台風のため、波が高く、みんな船酔いになっていました。高松に着いたら、鬼無まで汽車に乗り、そこから嵐の雨の中を歩いて行きまし

た。停電だったのか、ろうそくで食事をとったように記憶しています。」

（「創立九十周年記念誌　わたしたちの市岡」）

25　萬徳寺の石仁王

萬徳寺山門に置かれている仁王像は通例の金剛力士像ではなく、甲冑をつけた二天将姿の独特の石像。獣の革を剥いで作った鎧を着た姿に彫られたユニークな武装像であり、向かって左側の像は右手に獅噛（しかみ）も彫られている。おそらく四天王の中の持国天と増長天（または持国天と多聞天）が二尊形式をとって山門（二天門）を守っていると思われる。

★この仁王像については、幕末の怪力僧（萬徳寺五世住僧、観明「かんみょう」法師のほのぼのとした伝承がある。かつては正月三日に観明法師をしのぶ力餅大会があり、萬徳寺への初詣はこの日が多かった。）

「萬徳寺中興五世、観明法師は阿波に生まれた。背丈は低いが筋骨隆々とし、二百貫の庭石を独りで動かす怪力の持ち主であった。萬徳寺門前の石像の仁王尊二基を大切にし、寒い夜は抱きかかえて寺内に移して翌朝また元の門前に運び出してやった。文久三年（一八六三）正月、川辺の定光寺に移り、そこで維新を迎えた。神仏分離令が出て定光寺が廃寺されたとき、寺の梵鐘を下ろして身体に結びつけ、高松まで運んで売ったという。」

（香西史）

26　香西町軍人墓地

中笠居村および香西町出身の戦没者の墓碑を集めた墓地。萬徳寺境内にある。軍人墓地として整備されたのは、護国精霊之墓を建立した昭和二十六年（一九五一）五月。

個人の墓石で最も古いものは明治十年（一八七七）四月十二日、西南戦争に従軍し熊本県宇土町で戦死した今竹清次氏（二十四歳）。所属した丸亀歩兵第十二連隊は、明治十年（一八七七）二月十八日、西南戦争に出兵。戦死者百五十一名を出している。

次いで日清戦争戦死者二基、日露戦争戦死者七基、以下第一次大戦、シベリア出兵、日中戦争、太平洋戦争の戦死者の墓標が続く。

★日露戦争関連の墓石には、激戦地となった東鶏冠山、二〇三高地などの地名も見える。
★第二次大戦（太平洋戦争）の墓標の中には、昭和十九年（一九四四）十月二十六日神風特別攻撃隊大和隊の隊員としてフィリピンセブ島からゼロ戦で出撃、スリガオ海峡東方八十哩で特攻死した勝浦茂夫氏（二十歳）の墓がある。海軍の神風特攻隊攻撃の開始後わずか二日目の特攻死である。
★特攻死した香川県出身者は、海軍三十二名、陸軍六十九名の計百一名。

【私は、軍人墓地に、新しいお墓が建つことがない世の中で、よかったなアと思います。軍人墓地に、建てられて七十年以上たつ古いお墓しかなくて、よかったなアと、来るたびに思います。この軍人墓地に入るのは、私のおじいさんが最後でいいのです。ここには、もう新しいお墓は、いりません。子供のお墓も、孫のお墓も、そのまた次の子供たちのお墓も、軍人墓地の中に建てられるようなことが、あってはなりません。】

27　護国聖霊之墓（ごこくしりょうのはか／ごこくせいれいのはか）

香西町軍人墓地に建つ香西町出身戦没者の慰霊塔。寄せ墓。墓碑銘は高野山大僧正和田

性海師の筆になる。碑文（慰霊文）はない。
昭和二十六年（一九五一）五月十五日、萬徳寺境内に建立され、県内の戦没者慰霊塔の先駆けとなった。

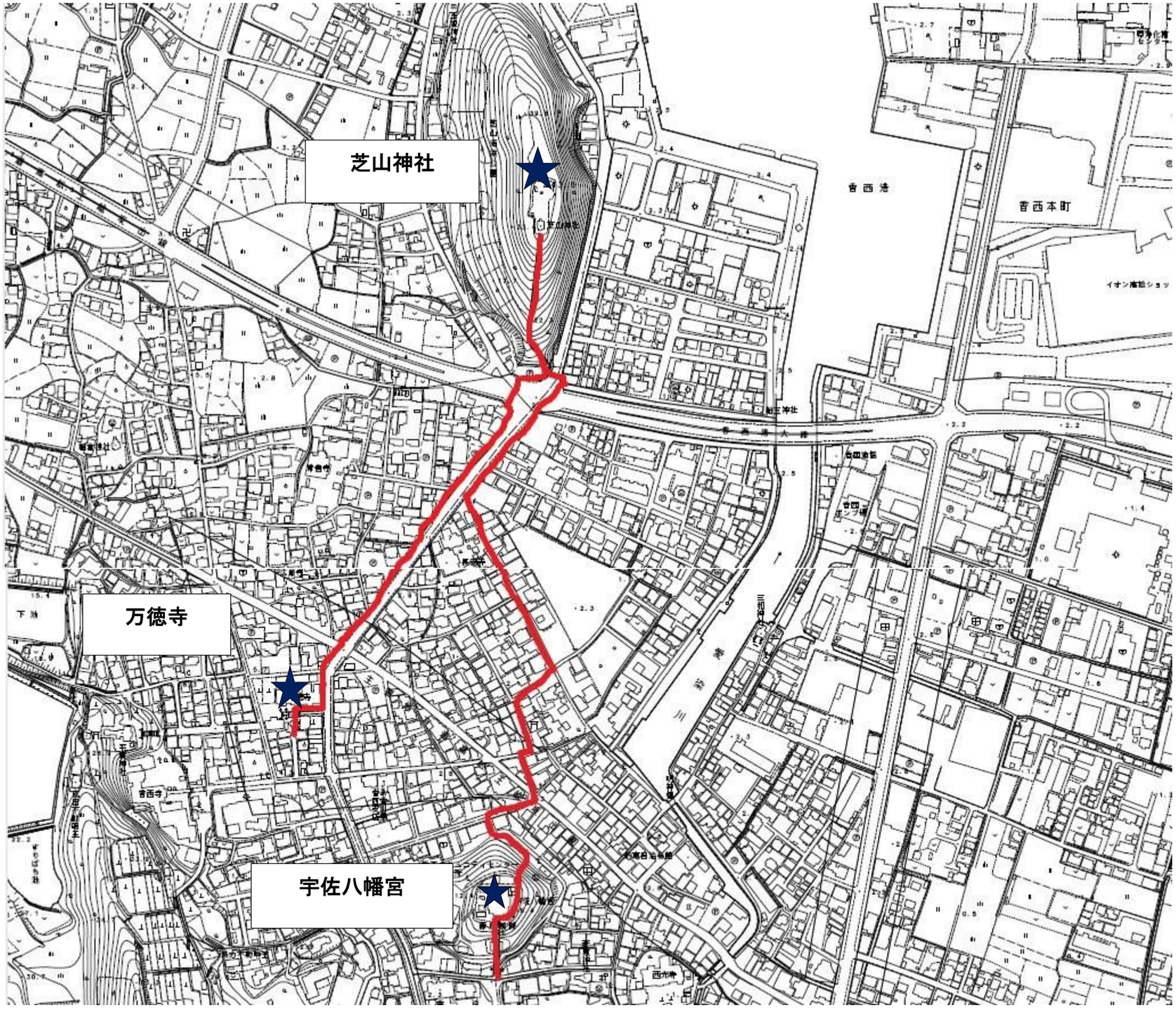
★慰霊文はなく、台座には西南戦争以後太平洋戦争までの約七十年間に戦没した香西町出身者二百九名の名前を刻んで寄せ墓にしてある。

★戦前、戦中の戦没者慰霊塔が忠魂碑、忠魂塔などと刻まれていたのに対し、香西町軍人墓地の慰霊塔は護国聖霊之墓と刻まれ、忠魂、忠霊という語を用いていない初めての慰霊塔。また、この後建てられる県内各地の慰霊塔にある慰霊文も、この慰霊塔には記されていない。

参考文献

『郷土史辞典　笠居郷探訪』立山信浩著、平成二十三年

ふるさと探訪「香西氏の史跡を訪ねる」探訪ルート



1月２０日（日）復路

※香西寺の大護摩　本日（平成３１年１月２０日）開催！

◆ことでんバス　下笠居線・香西線

【瓦町駅へ】24 歯科医療センター・イオン高松東店（瓦町経由）

中塚(12:17 発)→瓦町駅(12:37 着)

【高松駅へ】12 高松駅（昭和町市立図書館経由）

中塚(12:51 発)→高松築港(13:11 着)→高松駅（13:14 着）

✿次回のふるさと探訪は…

◎テーマ：「男木島の水仙を訪ねる」（予定）

◎とき：平成 31 年 2 月 24 日（日）午前９時～午前 11 時 30 分

◎集合場所：男木港　（男木交流館前）

◎講師：妹尾　共子さん（高松市文化財保護協会理事）

◎探訪先：男木島灯台、水仙街道等（※坂道が多いです）

◎参加費：無料

★船の便の御案内（往復大人 1,020 円、小学生 520 円）

◎行き：高松港（8:00 発）→男木港（8:40 着）

◎帰り：男木港（13:00 発）→高松港（13:40 着）

★注意

☆公共交通機関を御利用ください。

☆広報「たかまつ」２月１５日号に開催案内を掲載予定です。

（ホームページでは、より詳細な案内や過去の資料を御覧いただけます！）

☆小雨決行。当日、警報が発令された場合は、中止とします。

　なお、中止かどうか御不明な場合、午前７時３０分～９時３０分に文化財課（Tel 087-839-2660）でお知らせします。電話が通じない場合は実施予定ですので、集合場所にお集まりください。

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ

※参加中は、次のことに充分留意し、意義のある探訪としましょう。

１　交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
（必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、
道路の端を一列で歩きましょう。）

２　無理をせず、体調には十分気を付けましょう。

３　引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。

４　マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。

５　文化財や自然を大切にしましょう。